論　文

セフェリスとカザンザキス

志田　信男

§.0　はじめに

G．セフェリスはどうもカザンザキスにあまり良い感情をもっていなかったらしい。このことは、「日誌」[1]やE．キーリーの「ヨルゴス・セフェリスとの対話」[2]にもはっきりと表われている。いったい何故なのか？をこゝでは考えてみたい。実は、筆者は、この問題について、エピグラムを書いたことがある[3]。小稿の出発点はこのエピグラムに盡きているといってもよい。ご参考までにご披露しておく。

ヨルゴス・セフェリス氏に
ー〈近親憎悪〉ですか！？

あなたの
カザンザキス嫌いには
感心します
でも「どうして？」と
何時も思うのです

§.1　セフェリスのカザンザキスに関する言及

前掲「対話」の中で、キーリーは、カザンザキスについて、セフェリスに次のように問いかける[4]。

キーリー：さてもっと古い世代の他の有名な作家に話題を移しましょう。カザンザキスはいかがですか？合衆国では、カザンザキスは詩人たちによって尊敬されています。一例えばオーデンとか多くの重要な若手の詩人たちです；彼らの大部分はカヴァフィスを知っており、彼に同情的な立場をと

っています。しかし学生や文学を学び始めたばかりの人々の間では、カザンザキスははるかに最も人気のあるギリシア作家なのです。詩人及び小説家の両面においてです。私の仕事はだんだんと、詩であれ、フィクションであれ、けなしたりせずにカザンザキスの作品を論ずる努力をする方向に向っています。

セフェリス：そうですか。問題は、人はある作家と接触を保つ可能性がなければならぬということです。そしてカザンザキスの場合、私にはそれができないということです。ご存知のように、私にとっては恐るべき代物です。カザンザキスに関する限り、あなたに警告せねばなりません。第一に、彼の詩ーいわゆる詩ーがあります。そしてそれはもちろんオディシアスと喜劇です；他方彼の散文：小説があります。ところでこの小説に関する限り、私は判断する能力をもちません。それに全部読んだわけでもありません。私は私の信頼する人々から、それらの小説が大変よいものだと聞いています。そして多分大変よいものなのでしょう。でもオディシアスは別問題です。そこには、あなたには興味があると思われる文章があるかもしれませんが、詩が存在しないのではないかなと思うのです。今興味のある文章といいましたがーカザンザキスという人間に関する情報を提供する文章ということです；しかし私はそれは詩ではないと信じます。少なくとも私の信ずる詩ではないと。（下線筆者）

キーリー：詩的工夫（形態）とは別に「理念」といったものに関してはどうお考えですか？つまり哲学的もしくは宗教的立場の言明のような、です。

セフェリス：分りません。私は哲学的立場や世界観については何の考えもありません。あなたは御存知でしょう。世界観って奴が著作に干渉し始めるときには何時だってー私には分らないのです。私は世界観というものは、干燥した、冷淡な、そして（どういったらいいのか分りませんが）散文的な仕方で表現される方が好きです。私は世界観を詩作において表現しようとする人々を好みません。以前にセサロニキで、朗読会を開いたことを覚えていますが、ある哲学者が立上がって尋ねました：「ところで結局、セフェリスさん、あなたの世界観は何でしょうか？」そこで私は云いました。「親愛なる友よ、残念ながら、私は世界観を持たない、と申し上げます。私はいかなる世界観ももたずして書いているということを公衆の面前で告白せざるをえません。おそらくあなたはこれはスキャンダラスなことだと

お思いになるかどうか分りませんが、たゞ、私にホメロスの世界観がいかなるものかお聞かせ下さるようお願いしてもよろしいでしょうか。」そして答えはありませんでした。

ここでキーリーは、いささか閉口のていで、「ではもっと一般的な主題に移るとしまして…」と話題をセフェリスの故郷スミルナと彼の作品の関係に転ずるのである。

この個所の他に、セフェリスは、有名なシケリアノスとカザンザキスにかかわるノーベル賞問題に関して日誌の中で、ノーベル賞を二人の人間が分け合うという発想について批判している[5]。がセフェリスのカザンザキス批判の核心は、以上の対話の中に充分に出ていると思う。次にセフェリスの言及の意味を考えてみよう。

§.2　「詩」観の対立

キーリーとの対話の中でセフェリスが述べているカザンザキス論には、一貫して合性の悪い人間に対する嫌悪のようなものが感じられる。まずのっけから、作家との接触を保つ可能性について触れ、カザンザキスの場合はこれが不可能であり、彼にとって、 κάτι φοβερὸ〈恐るべき代物〉だと断言している。しかし、一応、カザンザキスの散文、すなわち小説については、判断する能力がないという留保をつけた上で、信頼する人々がπολὺ καλὰ（大変よい）というのだから、πολὺ καλὰ なのだろう。それに彼（カザンザキス）の作品を全部読んだわけでもない。（Δὲν τὰ ἔχω διαβάσει ὅλα.）とかなり投げやりな表現である。そして話題が大作（とされる）オディシアに関しては、小説とは全く別問題である、ときめつけている。そこには、詩が存在しない（ὅτι δὲν ὑπάρχει ποίηση.）のではないか、 とまでいうのである。そして読者に興味があるかも知れないカザンザキスその人に関して情報を与える文章、すなわち彼の思想・信条・世界観といったものに関して記述した文章を、詩とは信じない、少くとも自分の信じる詩ではない、と断言している。続く、キーリーの〈理念〉に関する問いに対するセフェリスの答えは、ある哲学者の彼に対する問いに答えるエピソードであるが、ホメロスの世界観は何か？と切り返したセフェリスの詩の本質に対する考えは明白であろう。詩には冗長な説明や見解の表明や世界観を世界観として記述する文章は異質であり、不要なものなのである。

詩と散文について、セフェリスは、「私たちが、散文という語によって意

味するところのものを検討してみよう。すでに数十年にわたって、詩人たちは、押韻や韻律のような詩の外的・慣習的標識ーこれらは、実際は、詩の本質的な標識では全くないわけであるがーの規則的な使用をしないですませる自由があると感じてきたのである。このことは散文と詩の間の区別が存在することをやめたということを意味しない。むしろそれは逆に一層本質的なものとなったのである。詩は一種のダンスである。ところが散文は、私たちを何処かへ連れて行ってくれる行進する足どりに一層似ており、また似ているべきなのである。散文の中では、私は、今あなたがたを、何処かへ導びいて行こうとしていることを、あなたがたに読んで聞かせている。…中略…詩においては、先行のステップは、決して次に続くステップの中に失われてはいないのである。反対にそれは記憶の中に固定されたままであり、全体としての詩の内部で、その場所に、手つかずのままにあるのである。ところが散文は、 前に進むにつれて、 そのステップを使用しながら上昇して行くのである[6]。」

セフェリスのこのような散文観・詩観からするなら、24巻、33,333行に及ぶ大作で、カザンザキスのいわゆる世界観が織り込まれ、オデュセウスが仏陀やキリストの化身など様々の人物と出会い、最後に一生を回顧して満足して死ぬという筋書きや雑駁で難解な語彙に充ちた「オディシア」が、いかにかけはなれたものであるかは明かであろう。評論や日記は別として、セフェリスは純粋な詩人であり、詩人としては、むしろ寡作であった。旅行記作者であり、むしろ小説家であり、散文家が本領であったカザンザキスと相入れない部分があっても止むをえないであろう。シケリアノスとカザンザキスの友情はともかく、ノーベル賞受賞にかかわる共同受賞表明など不幸な事件もあって、セフェリスの嫌悪観をかき立てたのかも知れない。また第２次大戦後のギリシア内戦の時代を通じて、両者の間の政治的立場のちがい、それからくる悪感情もあったかも知れない。

§.3　結語

前節で述べたように、セフェリスのカザンザキスに対する悪感情は、本質的に異質な二人の詩人（カザンザキスを詩人と呼ぶことにセフェリスは不満かも知れないが）の間にある深い詩論上の溝によるものが一つであるが、その前に、いやもしかしたらその後に、他の諸々の公的・個人的要素ー例えばノーベル賞事件や両者の政治上の思想や立場の相違からくる齟齬感や反感、そして又一つには、現代ギリシア人の屈折した近親憎悪にも似た感情による

ものかも知れない。これらの点に関しては、できれば別の機会に論じてみたい。最後に私見を述べれば、純粋な詩論としては、どちらかといえばエリオットに傾倒し、アンリ・ミショー，エズラ・パウンド等々現代詩人の翻訳に没頭したセフェリスに組するものである。しかし純粋詩やモダニズム詩だけが詩であるとは、もちろん思わない。いずれにせよ、思想遍歴としてベルグソンやニーチェに傾倒するのはよいとして、シャカやイエスや価値観も思想も異なる様々の人物が化身となって現われて、これが詩作中でその思想を述べるというようなことを想像しただけでゾッとする。カザンザキスには失礼かも知れないが、小稿を書いていて一寸大川隆法氏のことを想い出した次第である。しかし、「その男ゾルバ」、「石の庭」，「兄弟殺し」など彼の小説は、両次大戦前後を通じて不幸な時代にあって、ギリシア人としてのアイデンティティを求めるカザンザキスの執拗な志向を認めることができる。人物としても、立派な人であったようで、やはりセフェリスの観方は厳しすぎ、いささか偏見にちかい感情が、正当な詩論とは別に、次元のちがうところで一貫して流れていることを否定するわけにはいかないのである。

結局、両者は本質的に異質の人間だったのではなかろうか。セフェリスは真正の現代詩人であったが、カザンザキスは永遠の求道者であり、「旅行」する修道者(ascetic)であった、ということができるかも知れない。

注

1)George Seferis,Journal 1945-1951,traduit du grec par Roland Gasper Mercure De France,1973

2)Edmund Keeley:ΣΤΖΗΤΗΣΗ ΜΕ ΤΟΝ ΓΙΩΡΓΟ ΣΕΦΕΡΗ (A Conversation with George Seferis),Ἄργα,Ἀθήνα,1982.他の箇所でもカザンザキスに触れているかも知れないが、ここでは主としてこの対話に表われたセフェリスのカザンザキス観を論じた。

3)しだのぶお詩集、やばのろぎあⅥ，エピグランマタ・ヤポニカ，潮流出版社，1991.12,p.19

4)E.Keeley,op.cit. pp.96～102

5)カザンザキスとシケリアノスのノーベル賞問題は、二人ペアでなければ受賞しない、といったK.の発言をめぐって多くの議論を呼んだ。カザンザキスは何度もノーベル賞候補となったが、ついにこれを逸した。特にフランスの作家カミュと争った際（1957年度）は一票差でこれを失ったといわれている。この問題については、カザンザキス夫人エレニによる「ニコス・

カザンザキス一書簡に基づいた伝記」（Nikos Kazantzakis,A Biography Based on His Letters,by Helen Kazantzakis,translated by Amy Mims,に詳しい。特に同書438,465,470,472,508,522,558,559頁参照。

6)拙稿、セフェリスとマクリヤニス（その２），プラティア　第７号，プラティア・ミコノスの会　1985春季号（初出），セフェリス詩集，土曜美術社，1986所収，同書pp.151～152